

## イタリア・トレントへの旅

九州大学 先端エネルギー理工学専攻  
河野 俊彦

kawano@aes.kyushu-u.ac.jp

### 旅の準備

うっかり「7月末にイタリアへ行く」などと口を滑らせてしまったものだから、「じゃあ、核データニュースの記事をお願いね」という間髪入れぬS氏のお言葉の後、“トレントへの旅”なる表題まで付けられた原稿依頼状が電子メールで届きました。旅と言えば優雅に聞こえますが、実際は国際会議にありがちな“トレントでの缶詰”で、参加者三十名ほどの小規模なワークショップであったにも係わらず、気力・体力を必要とするものでした。その缶詰のラベルは「多段階直接反応への量子力学的アプローチに関する諸問題についての会議」で、LANLのChadwickらの呼びかけで、多段階直接過程 (MSD) の専門家をイタリア北部の町・トレントに集めて、それに関する諸問題を話し合おうというものでした。

さて、そんな専門家の集まりに私が何故参加したのか、と疑問に思われる方もいらっしゃるかと思います。私はMSDの専門家でしょうか？ ちょっと違う気がします。ともあれ、会議の案内の電子メールは、私の所に届きましたし、「参加する」という返事も出しました。なんとかなるさ、の気分です。それに、トレントと言えば、Trentino D.O.C.で知られるワインの銘醸地ですからね。さてさて、トレントへの旅の道は険しいのでしょうか。

### 福岡の夜明けからトレントの真昼まで

最近忙しい日々が続いたこともあって、航空券の手配を旅行社にするのが遅くなってしまい、実際に切符を手にしたのが出発の4日前という慌しさでした。

福岡空港を早朝に発ち、関空へ。そこからエールフランスで一旦パリへ飛び、さらにミラノ行きの便に乗り換えました。ミラノのホテルに着いたのは夜11時。翌朝、睡眠不足と時差ボケの頭をかかえて、ミラノ中央駅へ。トレントは、ここから特急列車で3時間程のところですよ。ミラノを出た列車は東に向かい、ヴェローナで、北に進路を変えます。ここから、線路は山岳地の谷合を走り、山肌には露出した石灰岩が見えはじめます。あの有名なドロミテの山々はもうすぐです。

トレントに到着したのは、正午ごろ。初めて見るトレントの街は、石灰岩の山々に囲まれた古い町並みの美しい所でした。ドーモを中心に広がる旧市街はそれほど大きくはなく、端から端まで歩いて回れる程度です。山裾のなだらかな所には葡萄畑と果樹園が広がり、そこに険しい断崖がコントラストを付けます。

ホテルにチェックインを済ませた後、市内探検に出かけました。ホテルを出てすぐの所にあるのが、フォンコンシリオ城。まずはここを見学、と思って入ろうとすると、目の前を見知った一団が歩いているのが見えました。たった今、城見学から出てきた河合先生と千葉氏、渡辺氏で、昼食に行くとおっしゃるので、城は後回しにして、そのまま同行しました。そして、よくあるように、この城の中を見る機会は二度と無かったのです。

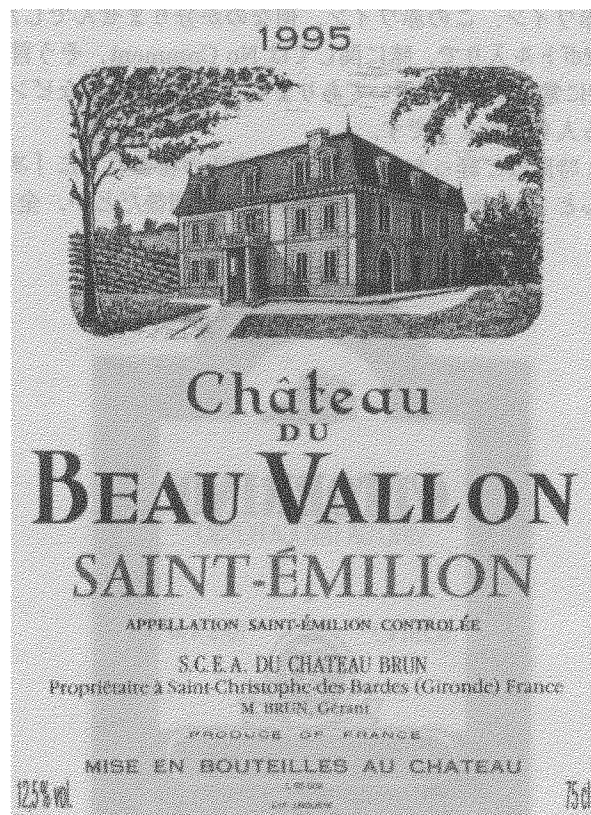
トレントにて

夕方、ホテル近くのレストランで食事。ピッツアの基本「マルゲリータ」と Trentino D.O.C の Chardonnay を注文。このシャルドネ、しっかりした味なんです。ブルゴーニュのものに比べてキレがイマイチです。赤にすれば良かったかな、とちょっと後悔しましたが、ホテルに戻ればド・ゴール空港の免税店でちゃっかり仕入れておいた St-Émilion があるので、やはりここは冷えた白でしょうか。ちなみに、この St-Émilion ですが、まだ味が硬く、飲むにはちょっと早すぎたようです。日本に持って帰ってもう 1,2 年寝かせるべきでした。

ワークショップの会場となったのは、トレントにある ECT\* (European Centre for Theoretical Studies in Nuclear Physics and Related Areas) で、ここの副所長は、あの D.M.Brink 博士です。研究所と言っても、建物はこぢんまりとした 3 階建てで、普通の民家とあまり変わりありません。理論核物理に関する研究を標榜してはいるようですが、実際は「なんでもあり」のようで、そこを ECT\* の \* で表しているそうです。

ワークショップへは、核理論の専門家・高エネルギー核反応実験の専門家・(自称) 実践的物理学者・核データの専門家等が参加しておりました。会議のプログラムは一応あったのですが、殆ど無きに等しい状態でした。

会議は、幾つかの Talk と、Working Group 形式によるトピックス毎に分れての議論を



予定していましたが、Talkが時間内に終わった例は無く、その後のトピックスに関するディスカッションも予定変更が相次ぎ、始めに作った会議の予定表は、修正に次ぐ修正で真っ黒になる有り様です。予定通り進まない理由は、講演を何度も中断させる聞き手の問題で、質問すること自体は構わないのですが、議論が次第に別の話に流れていっても、その軌道修正を行なう仕組みが無かったのが困りものでした。特に Kerman 氏の追究が厳しく、会議は次第に “Kerman vs. others” の様相を呈してきました。

MSD の会議ですので、FKK,TUL,NWY 理論が議論の主要なテーマです。中でも FKK は、今まで多くの解析で用いられてきたことと、理論そのものに未解決の問題点があることから、会議の中心となります。それに、何と言っても、FKK の 2 番目の “K” がその場に居るのですから。もっとも、私たちが FKK 理論計算と呼んでいるものを、Kerman 氏はお気に召さないようで、FK(Feshbach が考えて Kawai が修正したから)とか、FKK-B(FKK を Bonetti がアレンジしたから)とか言っていました。

### 雨とワインとの対話

初日の会議が終わったのが 6 時。初めから議論がフルスロットル状態で、いささかウンザリ気味です。7 時からレセプションがあるので、それまでの 1 時間、私は外の野原で転がっていました。

レセプションは研究所のカフェテリアに用意されており、メニューは簡単なイタリア料理とスプマンテ、赤ワイン。この赤ワイン、何なのか分かりませんでした。スクリューキャップのついた 1l ボトル入りで、味に関しては No Comment。そう言えば、このカフェテリアでは、昼食時に常時ワインが置いてあります。250ml の小さなビン入りですが、真昼間から飲んでいる人も居たようです。

食事が始まって 1 時間ほど経ったところで、研究所の秘書の方に「次のバスは何時？」とたずねたら、なんと 10 分後で、しかもその次は 1 時間後だとか。全員慌てて帰り支度



を始めました。建物を出ようとした矢先に雨が降り始め、傘をさしてバス停へ。停留所の前の崖がちょうど工事中で、補強材でトンネルが組まれており、取り敢えずそこで雨宿りしました。次第に雨足は強まり、トンネルの下にも雨漏りしています。天井があるにもかかわらず、傘をさして凌いでいましたが、そのうち、雨漏りどころか、上からバケツの水をひっくり返したようになってきて、傘が全く役に立ちません。実はその頃、雨はやや弱まっており、トンネルに降っていたのは、その上に溜った水が流れ落ちているだけで、外に居た方がかえって濡れずに済んだのでした。バスが来るまでのたった10分のことでしたが、よりもよって最悪の時間に最悪の場所でバスを待っていた次第。

この日に限らず、トレントに滞在した1週間、天気は気まぐれでした。朝、雲一つない晴天でも、夕方、にわか雨ということがしばしばあり、必ず傘を持ち歩いていました。研究所による晩餐会が催された日も、夜は雷雨。でも翌朝は、何事も無かったかのように澄みきった青空です。

水曜日の午後は、Excursionとなっていました。要するに自由時間です。ハイキングに行ってもよし、町中を散策してもよしで、しばしの休息です。千葉氏と私は、特急列車で30分の所にあるボルツァーノという街に出かけることにしました。ボルツァーノはオーストリアの国境にも近く、ドイツ語を使う人も多いようです。町中の案内板は、イタリア語とドイツ語で書かれており、町並みも何処と無くオーストリア風です。

夏にブゾーニ・ピアノコンクールが開かれるという古い教会を見て、タルヴェラ川の橋の袂まで散歩し、イタリアに来たからには忘れてはならないジェラートを買おうと、アイスクリーム屋へ向かいました。コーヒー味の指さして、1cupのつもりで「ウノ」と言おうとした瞬間、店のおばさんがドイツ語で「アイネ？」なんて聞いてきたものだから、とっさに「ウネ！」などと口走ってしまいました。

ボルツァーノでショッピングをした後、トレントに戻り、町中のスーパーマーケットへ。目的は勿論、地元のワイン。Trentino D.O.C.では、アルザス地方のように、葡萄の種類でワインを分類していると聞いていたので、選ぶのが楽です。ワイン売場に並んでいたのは、カベルネ・ソーヴィニオン、メルロー、シャルドネ、ミュスカ等。シャルドネは初日にレストランで試したので、何か変わったものが無いかと物色していたら、聞いたこともない葡萄のワインを見つけました。マルツェミーノという種類の葡萄の赤ワインで、値段は1000円程度。迷わずこれを選んでホテルに戻り、冷蔵庫に放り込みました。

夕食から帰って、一人でこっそりと飲んでみましたが、これは「当たり」です。味わいはフルーティな軽めで、毎日飲んでも良さそうです。実際、その日から3日間、毎晩これを寝酒にしていました。帰国後、この葡萄のワインを探しましたが、福岡では手に入らないようです。

そうやって一人飲んだくれていた間にも、会議は進行し、金曜日の午後、全ての議題を消化したことにして、サマリーの時間となりました。最後のサマリートークはIndiana大学のWalker氏によるFKKの意味についての考察で、FKKとは、“First K(C)all Kerman”の略だそうです。なんだかよく分かりませんが、「最初にKermanが叫ぶ」なんのでしょうか。それを聞いたカーネル・サンダース氏は、「いや“First Kill Kerman”だ」とかおっしゃってましたが、これはちょっと危ない。「最初にKermanが殺す」なら、その通りだったんですが、「まずKermanをやっつまえ」だとシャレにならないです。

最終日の晩は、参加者の半分ほどでツアーを組んで、ヴェローナの野外オペラ観賞で

す。70kmほど離れたヴェローナまでバスで行くのですが、ツアー・コンダクタのミミおばさん、とにかくよく喋る。バスが走り始めて、マイクを取って最初に言った言葉が「皆さん、最低一言は私と会話してくださいね。さもないとオペラの入場券をあげませんよ」。ツアー会社の人かと思ってたら、実はアルバイトだそうで、本職は学校の先生だとか。バスがヴェローナに到着するまで、ミミおばさん、ひたすら喋り続けていました。

オペラ会場のアリーナに着いたのは6時半。開演は9時すぎだというのに、すでに入場を待つ行列ができています。このアリーナは古代ローマの円形劇場で、夏に野外オペラが毎日のように上演されることで有名です。客席数は22,000もあるそうですが、「アイダ」のような人気演目の切符の入手は困難だそうです。当日の出し物は「トスカ」。切符が買えないということはありませんでしたが、開演1時間半前にアリーナに入ったときには、すでに空いた席を探すのが難しいほど、会場は混雑していました。席に座るのは諦めて、幕が開いたら通路に座りこんで見ようとの魂胆で、出入口付近に立って、開演を待ちました。

開演まで、1時間程。だんだんと黒い雲が空を覆い始め、稲妻が走ります。ポツリ、ポツリ、と来たと思ったら、突然の夕立ち。こういう時に出入口に居ると便利で、そのまま階段を数段降りて屋根のある場所に避難しました。雨はどしゃぶりになり次々と人が逃げ込んできます。それでも多くの人が屋外で頑張っているのは、せっかく取った場所を渡すまいとのしてのこと。上演直前に雨でオペラが中止になっても、払い戻しはしないそうです。運良く、雨は開演前にあがりましたが、座席はどこも水浸し。最初は席が無かった人達も、どさくさに紛れて席を確保したようですが、私は相変わらず人混みを避けて出入口あたりにつっ立って居ました。諦めて濡れた椅子に座ったのか、お尻だけが濡れている人が前を歩いて行きます。

オペラが終わったのが0時半。バスがヴェローナを出たのが1時で、ホテルに戻ってシャワーを浴びてベッドに入ったのが3時でした。よく朝は9時に出発です。コップ一杯だけ残っていたマルツェミーノを飲み干し、4時間だけ眠ることにします。

### そしてドナウへの旅

トレントを9時に発ち、途中インスブルックに立ち寄り、全行程を特急列車で8時間かけてウィーンにたどり着きました。今回のヨーロッパ行きのもう一つの目的は、ウィーン大学の Vonach 氏とのミーティングです。ウィーンと言えばコンサートじゃないか、などと勘ぐらないように。8月はシーズンオフなので、音楽の都と言えども、観光客相手のサロンコンサートくらいしかやっていません。

Vonach 氏とは、 $^{58}\text{Ni}(n, \alpha)$  反応断面積について議論する予定でした。最近幾つかの新しい測定が出ているので、それらに関する情報収集と、こちらで行なっている計算値との比較等話を話してきましたが、トレントでの議論と比べて内容が自分レベルであったので、こちらの方が気が楽です。もっとも、断面積の話をしていたのに、Vonach 氏はどうも自分の趣味の共分散の方に話を持って行きたいらしく、なんとなく話題を誘導しているようです。

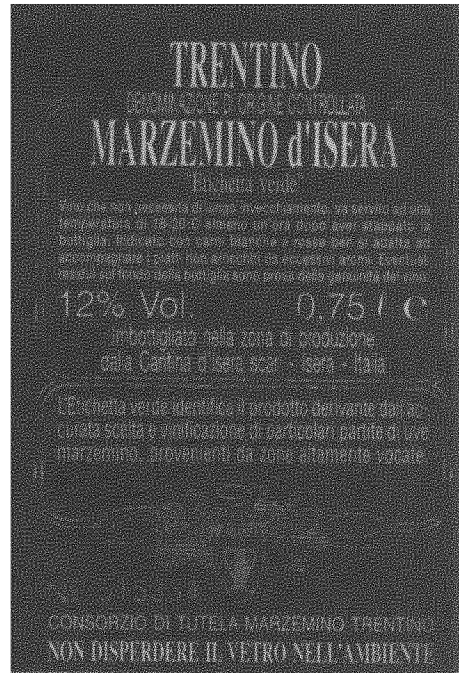
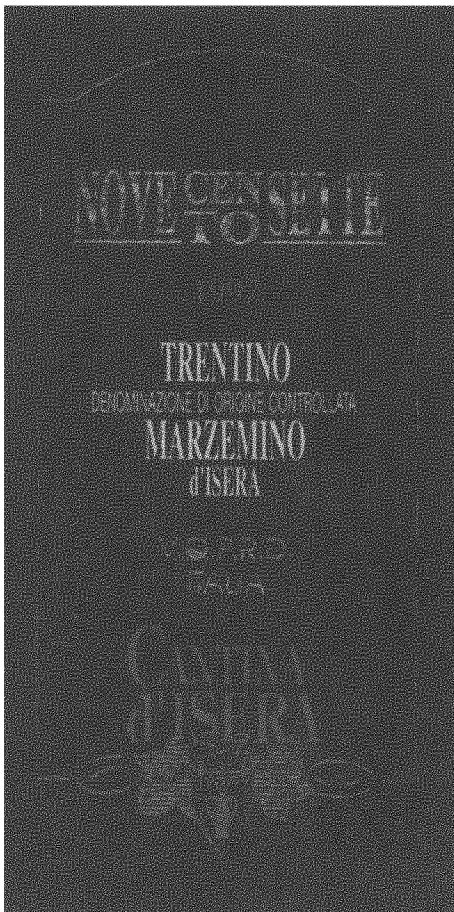
夕方、土産を探すためにシュテファン寺院のあたりまで散歩し、近くにちょっと高級そうなスーパーマーケットを見つけました。ヨーロッパでのお土産は、スーパーやデパートの食料品売場に、意外と面白いものがあります。ここで買ったのは、プディングパウダ

(インスタントのカスタードクリームみたいなもの), スプレー式の生クリーム(ケーキに添えたりコーヒーに入れるのに便利), 木苺ジャム, そしてもちろんオーストリアワイン。このワインはお土産では無くて, 今晚飲むためのものです。

オーストリアのワインは, 日本ではあまりメジャーではありませんが, ドイツワインと似たタイプのワインが作られています。ただ, ドイツに比べると, どちらかと言えば辛口指向のようです。リースリングやミュラー・トゥルガウのような, ドイツで広く栽培されている葡萄品種もたくさん作られていますが, ここの特徴の一つは, グリュナー・フェルトリナーというオーストリア原産の葡萄で, 軽くて口当りの良い白ワインができます。

スーパーで買ったのは, リースリングとグリュナー・フェルトリナー。どちらもウィーン近郊で作られているものです。それから, ガス入りのミネラルウォーター。ホテルに戻って冷蔵庫で冷やしておきます。

8月のウィーンの気温は, 日本の夏と変わりありません。また, 空気が乾燥しているせいか, 体の水分がどんどんと蒸発していく気がします。夜, シャワーを浴びてから, 冷蔵庫からワインとミネラルウォーターを出し, 7:3 くらいの割合でワイングラスに注ぎます。炭酸の泡が立ち昇り, ちょっとしたシャンパンのようですが, 飲むときはビールのように



一気にグビッと。干からびた体に水分が行き渡るのを実感することができます。

翌日は、いよいよ帰国です。ウィーン国際空港から再びド・ゴール空港まで戻り、そこから成田へ。成田で入国手続きを済ませた後、国内線ターミナルから福岡へと、随分遠回りでのルートで戻ってきました。この文章も、ここでおしまいです。トレントでの量子力学的多段階直接過程に関する専門家会議の様子が、皆さんに伝わったでしょうか。えっ？全然伝わらないって？やはり私は専門家ではなかったようです。

